

NEW JAPAN
PHILHARMONIC
SUMIDA, TOKYO

新日本フィルハーモニー交響楽団
2026/2027シーズン



4
APRIL, 2026



2026/2027 シーズン
新日本フィルハーモニー交響楽団 4月演奏会

Contents

トリフォニーホール・シリーズ / サントリーホール・シリーズ #669 相場ひろ	3
すみだクラシックへの扉 #38 小室敬幸	11
楽員ストーリーズ ⑤④ 田村安紗美 (ヴァイオリン)	17
NJP from Inside	18
2026 / 2027 シーズン 定期演奏会プログラム	22
NJP 5月公演 柴田克彦の鑑賞ポイント	27
お客様からの声	29
室内楽シリーズ	30
音のアトリエ	31
「パトロネージュ・システム」のご案内	34

■特別支援企業

オリックス

in 鹿島

大和証券

東京東信用金庫

NOMURA

フジサンケイグループ

三井住友銀行

■特別支援団体

公益財団法人 オリックス宮内財団

〈コンサートの感想をお寄せください〉

QRコードを読み込み、WEBにてお答えください。
<https://www.njp.or.jp/qs>

いただいたお声は次号以降の定期演奏会プログラムなどでご紹介させていただく可能性がございます。ご了承ください。



特別支援企業／団体は、新日本フィルの運営を支援しています。

Triphony Hall Series
Suntory Hall Series
2026-2027 Season

#669

4.11 [土]

トリフォニーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
トリフォニーホール・シリーズ 第669回定期演奏会
2026年4月11日(土) 14時00分
すみだトリフォニーホール

4.12 [日]

サントリーホール・シリーズ

新日本フィルハーモニー交響楽団
サントリーホール・シリーズ 第669回定期演奏会
2026年4月12日(日) 14時00分
サントリーホール

◎バツェヴィチ (1909-69)

オーケストラのための序曲

Grażyna Bacewicz: Overture for Orchestra

約5分

◎クララ・シューマン (1819-96)

ピアノ協奏曲 イ短調 op.7 *

Clara Schumann: Piano Concerto in A minor, op.7 *

約25分

I. Allegro maestoso

II. Romanze: Andante non troppo con grazia

III. Finale: Allegro non troppo – Allegro molto

—— 休憩20分 ——

◎サン＝サーンス (1835-1921)

交響曲第3番 ハ短調 op.78「オルガン付き」**

Camille Saint-Saëns: Symphony No.3 in C minor, op.78 **

約40分

I. Adagio – Allegro moderato – Poco adagio

II. Allegro moderato – Presto – Maestoso – Allegro

[指揮] カレン・ニーブリン

Karen Ní Bhroin, Conductor

[ピアノ] 小林愛実 *

Aimi Kobayashi, Piano *

[オルガン] 室住素子 **

Motoko Murozumi, Organ **

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙

Munsu Choi, Concertmaster

[アシスタント・コンサートマスター] 立上 舞

Mai Tategami, Assistant Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール(公益財団法人墨田区文化振興財団) [4/11公演]

■特別協賛：オリックス株式会社 / 公益財団法人オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金(舞台芸術等総合支援事業(公演創造活動))

独立行政法人 日本芸術文化振興会

公益財団法人 花王 芸術・科学財団

公益財団法人 三菱UFJ信託芸術文化財団

■後援：アイルランド大使館

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス

公益財団法人 オリックス宮内財団



大使館



Ambasáid na hÉireann | An tSeapáin
Embassy of Ireland | Japan
アイルランド大使館 | 日本



©Marshall Light Studio

カレン・ニーブリン [指揮]

Karen Ni Bhroin, Conductor

アイルランド生まれ。アイルランド国立大学ダブリン校とオハイオ州ケンタッキー州立大学を卒業後、マリン・オルソップ、ナタリー・シュトゥッツマンらに指揮法を学ぶ。これまでにアイルランド国立交響楽団、ケベック交響楽団、モントリオール・メトロポリタン管弦楽団などに客演。現在はイギリスを中心に活動し、ロンドン交響楽団、ロイヤル・フィルハーモニー管弦楽団、BBC交響楽団、BBCウェールズ・ナショナル管弦楽団、マンチェスター・カメラータに客演した後、2025年7月にBBCプロムステビューを飾った。イギリスでの指揮活動のほか、オーストリアのザルツブルク・モーツァルテウム大学のシニア・アーティスト・イン・レジデンスにも就任しヨーロッパへの活動の場を広げている。オペラ分野でも頭角を現し、プレゲンツ音楽祭でエナ・ブレナン『Hold Your Breath』世界初演を指揮して絶賛を博す。またイングリッシュ・ナショナル・オペラではドニゼッティ『愛の妙薬』、ウェールズ・ナショナル・オペラなどにも度々起用されている。

21年には指揮者マリン・オルソップが立ち上げたナショナル・オーケストラ・インスティテュートのアカデミーに参加。また、女性指揮者の支援を担い、アロンドラ・テラ・パーラやカリーナ・カネラキス、アレナ・フロンなどを輩出したタキ・オルソップ指揮者フェローシップを24年に授与。「カレンは非常に才能があり、指揮者としても成長を続けている。彼女のエネルギー、音楽性、そして思いやりのある仕事ぶりは、今後目覚ましいものになるだろう」(オルソップ)と称された。本公演が日本デビュー。



©HOSOO CO., LTD

小林愛実 [ピアノ] Aimi Kobayashi, Piano

2021年10月、第18回ショパン国際ピアノコンクール第4位入賞。7歳でオーケストラと共演、9歳で国際デビューを果たした。数多くの国に招かれ、スピヴァコフ指揮モスクワ・ヴィルトゥオーゾ、ブリュッヘン指揮18世紀オーケストラ、ソビエフ指揮ミュンヘン・フィルなど国内外の多数のオーケストラと共演。10年に14歳でEMI ClassicsよりCDデビューし、サントリーホールで日本人最年少となるリサイタルを開催した。2015年10月、第17回ショパン国際ピアノコンクールではファイナリストとなった。18年にはワーナー・クラシックスとインターナショナル契約し、『ニュー・ステージ〜リスト&ショパンを弾く』をリリース。21年8月CD『ショパン：前奏曲集他』をリリース。24年11月に最新CD『シューベルト：4つの即興曲作品142、ピアノ・ソナタ第19番八短調、ロンド イ長調(連弾)他』をリリース。フィラデルフィア・カーティス音楽院で、マンチェ・リュウ教授のもと研鑽を積んだ。2022年3月、第31回出光音楽賞受賞。



室住素子 [オルガン] Motoko Murozumi, Organ

東京大学文学部美学科在学中、パイプオルガンに出会い、その音色に魅了されて始めた。東京藝術大学卒業、同大学院修了。秋元道雄、H.ピュイグ=ロジェ、Z. サットマリー各氏に師事。安宅賞受賞。1989~97年水戸芸術館音楽部門主任学芸員を務め、オルガン講座に対して吉田秀和館長賞。その後、活動の場を、都響、N響、新日本フィル、読響などオーケストラへと広げた。特に新日本フィルとは、1997年のトリフォニーホールの開館時に、ロストロポーヴィチの指揮で共演して以来、30年近く共演を重ねている。また、サン=サーンスの交響曲3番「オルガン付き」は、ジャン・フルネとの5公演で研鑽を積み、G.ベルティーニ/都響、秋山和慶/サイトウ・キネン・オーケストラ、山田和樹/モンテカルロ・フィルほか、70公演余りを重ねている。海外では、2010年に小澤征爾/サイトウ・キネン・オーケストラとプリテン「戦争レクイエム」をカーネギーホールにて。17年には山田和樹/横浜シンフォニエッタとモスクワのロストロポーヴィチ音楽祭に参加。日本オルガニスト協会会員、小澤征爾音楽塾講師(06年)、水戸芸術館市民のためのオルガン講座講師。

19世紀から現代に至るまでの音楽の歴史をつぶさに見ていくと、作曲家から演奏家、教育者までも含む音楽家の世界に多くの女性が存在して、さまざまな活躍を繰り広げていたことを知ることになる。一般的な音楽史では、特に作曲家について女性の名前が挙げられることはほとんどないけれども、現実の女性の活躍ぶりからすれば、それは非常に不当なことだ。例えばフランスのルイズ・ベルタン(1805~77)はパリのイタリア座とオペラ座の2劇場で歌劇を発表し、エクトール・ベルリオーズ(1803~69)が高く評価したにもかかわらず、批評家たちからはまともに相手にされなかった。晩年のフランツ・リスト(1811~86)の秘書を務めたマリ・ジャエル(1846~1925)は、リストから「楽譜に男性の署名があれば、すべてのオーケストラの指揮台に置かれるだろうに」とその才能を惜しまれた。またシャルロット・ソイ(1887~1955)は、男性名で作品を公表することを余儀なくされた上に、その楽譜の大半を出版できずに世を去った。近年19世紀以降の女性作曲家に注目が集まり、作品の蘇演や録音が相次いで世間を賑わせているけれども、それはけっしてフェミニズム的立場を装ったゴリ押しなどではなく、歴史が持っているながら男性目線で切り捨てられていたものを取り戻し、各時代の音楽の豊かさをそのままに再現しようという試みに他ならない。

今回採り上げられるグラジナ・バツェヴィチ(1909~69)とクララ・シューマン(1819~96)は、それぞれに演奏家として名を馳せたことで作品出版の機会にも恵まれ、こんにちに名を残したとはいえ、いまだ正当な評価を得るところまでは至っていないように思う。特にクララ・シューマンについては、ピアノ協奏曲に見られるような夫ロベルト(1810~56)に与えた影響も含めて、もっと多角的な評価が必要だろう。なにより、これらの作品の面白さに、多くの人が目を向けるようになれば、と願わずにいられない。

■ バツェヴィチ：オーケストラのための序曲

ポーランド出身のグラジナ・バツェヴィチは、リトアニア出身の音楽家であった父とポーランド人の母の間に生まれ、ワルシャワ音楽院に学んでヴァイオリン奏者としてまず世に出た。その後奨学金を得てパリに赴き、作曲をナディア・ブーランジェに師事して、帰国後はポーランド放送交響楽団のコンサートマスターと作曲家というふたつの方面で活躍すること

ヴァイオリニスト=作曲家として活躍 ▶

戦況厳しい最中で作曲 ▶

なる。ちなみに、ふたりの兄もそれぞれに作曲家として名を残している。「序曲」は1943年に書かれ、無窮動な動きが基調となった激しい曲想は、当時のポーランドをめぐる戦局を反映しているとも言われる。冒頭にティンパニが提示する音形のリズムはベートーヴェンの交響曲第5番ハ短調冒頭の主題と共通すると同時に、大戦中の英国BBC放送によるラジオ番組「Vは勝利(ヴィクトリー)のV」のオープニングに用いられたモールス信号の「V」にも通じており、中間にあらわれる牧歌風のエピソードでも3連符と長音というかたちで繰り返し登場する。

[楽器編成] フルート2、ピッコロ、オーボエ2、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、吊しシンバル、大太鼓、小太鼓、トライアングル、グロッケンシュピール、弦楽5部。

■ クララ・シューマン：ピアノ協奏曲 イ短調 op. 7

10代で作曲・自ら初演 ▶

クララ・シューマン(旧姓ヴィーク)はピアノ教師であった父フリードリヒ・ヴィークの教えを受けて9歳でピアニストとしてデビューし、11歳から創作を始めるなど、早くから豊かな才能を開花させていた。ピアノ協奏曲イ短調 op. 7は14歳の時にまず終楽章のみが「協奏的楽章」として作曲され、管弦楽部分は父の生徒のひとりであり、後に夫となるロベルト・シューマンの助けを借りて完成に至った。1835年前半の2楽章が作曲され、さらに終楽章に改訂が施されて全曲が完成する。同年11月9日、フェリックス・メンデルスゾーン(1809~47)の指揮、クララ自身の独奏によって初演され、以後彼女は演奏会でたびたびこの作品を採り上げて好評を得た。

先んじて発揮された才能 ▶

全3楽章を切れ目なく演奏するという形態は当時まだ珍しかったものの、メンデルスゾーンのピアノ協奏曲第1番短調という先例があり、おそらくクララは作曲者本人を通じてそれを知っていたのであろう。他方、3楽章の構成や3拍子の舞曲を基本とする終楽章のコンセプトをはじめ、多くの点でロベルトが1845年に完成させるピアノ協奏曲イ短調 op. 54と類似しており、意識的にか無意識にか、ロベルトはクララの作品からさまざまな影響を受けたとみられる。

曲の構成と音楽の特徴 ▶

第1楽章 アレグロ・マエストーソ

比較的規模の小さいソナタ形式で書かれ、ピアノ独奏は歌謡性よりも技巧的な動きを重視した書法が一貫している。

第2楽章 ロマンツェ：アンダンテ・ノン・トロppo・コン・グラツィア

一転してピアノが優美な音楽を奏でる。管弦楽は沈黙し、チェロ独奏

のみがピアノと対話を交わす。

第3楽章 フィナーレ：アレグロ・ノン・トロッポ～アレグロ・モルト

ティンパニのトレモロがトランペットのファンファーレを導き出し、続けてピアノ独奏が3拍子の舞曲風な楽想を奏でて第3楽章が開始される。前半2楽章を合わせたほどに長大であり、技巧的な見せ場も多い。

[楽器編成]ピアノ独奏、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、トロンボーン、ティンパニ、弦楽5部。

■ サン=サーンス：交響曲第3番 ハ短調 op. 78「オルガン付き」

▶ 自身で指揮、
オルガンを演奏

カミーユ・サン=サーンス(1835～1921)の交響曲第3番は、彼の生涯でもっとも美りの多かった1885年から翌年にかけて書かれ、1886年5月19日に英国の王立フィルハーモニック協会にて作曲者指揮の下に初演された。翌年行われたフランス初演では、作曲者はオルガン奏者として演奏に参加している。

▶ 曲の構成と
音楽の特徴

第1楽章 第1部：アダージョ～アレグロ・モデラート

短い序奏に続いて、ソナタ形式による主部が始まる。第1主題はグレゴリオ聖歌の「怒りの日」の冒頭と同じ音形で始まるもので、これは循環主題となって、さまざまな変容を経つつ全曲を通してあらわれる。

第1楽章 第2部：ポコ・アダージョ

第1部より切れ目なく続くこの部分で、初めてオルガンが登場する。3部形式で書かれており、主部では息の長い抒情的な旋律がオルガンの持続音の上で歌われていく。

第2楽章 第1部：スケルツォ

ヴァイオリンの力強い主題とそれに呼応するティンパニに始まり、激しく熱い音楽が繰り広げられる。ピアノの活躍も印象的である。

第2楽章 第2部：フィナーレ

オルガンの壮麗な響きと共に幕を開けるフィナーレは、循環主題に基づくコラル主題が提示されると、すぐにそこから派生した二重フーガが始まる。歌謡的な第2主題の提示の後、再び錯綜とした対位法書法と共に音楽は大きく高揚してクライマックスを迎える。

[楽器編成]フルート3(ピッコロ持替)、オーボエ2、イングリッシュホルン、クラリネット2、バスクラリネット、ファゴット2、コントラファゴット、ホルン4、トランペット3、トロンボーン3、チューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、吊しシンバル、トライアングル、ピアノ(4手)、オルガン、弦楽5部。



あしたに必要なものをつくる。人々の心や地球がやせ細るものではない、
希望と呼べるものをつくる。そのために集まる。そして100年先を思い、大事なことに気づき、
知恵を探す。技術を生み出す。きっとよくなる。きっとよくなる。
そのこころざしを推進力に、つくりながら、つくりながらしあわせを見つける。

「人が生きる」につながるものを、
KAJIMAはつくる。

100年をつくる会社
in 鹿島

豊島美術館
鹿島特設サイト



SUMIDA
TOBIRA of classic
2026-2027 Season
#38

4.17^[金] 18^[土]

すみだクラシックへの扉

新日本フィルハーモニー交響楽団 定期演奏会 すみだクラシックへの扉 第38回
2026年4月17日(金)14時00分 すみだトリフォニーホール
4月18日(土)14時00分 すみだトリフォニーホール

〈オーストリア〉

Passion for the Best

その情熱が、可能性をひらく。

限界を超えて、ベストをひたむきに追い求める。

大和証券グループは、挑み続ける情熱を失わない、すべての人を応援します。

大和証券グループ

●モーツァルト (1756-91)

歌劇『フィガロの結婚』K.492 序曲

Wolfgang Amadeus Mozart: Overture to "Le nozze di Figaro", K. 492

約5分

●モーツァルト

ヴァイオリン協奏曲 第5番 イ長調 K. 219 「トルコ風」*

Wolfgang Amadeus Mozart: Violin Concerto No. 5 in A major, K. 219 *

約30分

I. Allegro aperto – Adagio – Allegro aperto

II. Adagio

III. Rondeau: Tempo di Menuetto

—— 休憩20分 ——

●ベートーヴェン (1770-1827)

交響曲 第7番 イ長調 op. 92

Ludwig van Beethoven: Symphony No. 7 in A major, op. 92

約35分

I. Poco sostenuto – Vivace

II. Allegretto

III. Presto

IV. Allegro con brio

[指揮] アルマ・ドイチャー

Alma Deutscher, Conductor

[ヴァイオリン] 中原梨衣紗 *

Riisa Nakahara, Violin *

[コンサートマスター] 崔(チェ)文洙

Munsu Choi, Concertmaster

■主催：公益財団法人 新日本フィルハーモニー交響楽団

■共催：すみだトリフォニーホール（公益財団法人墨田区文化振興財団）

■特別協賛：オリックス株式会社/公益財団法人オリックス宮内財団

■助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（公演創造活動）
独立行政法人 日本芸術文化振興会

■後援：オーストリア大使館/オーストリア文化フォーラム東京
ブリティッシュ・カウンシル

アラーム付時計、携帯電話等をお持ちのお客様は、演奏中に鳴らないようお確かめください。
演奏途中でのご入場、場内での録音および撮影はかたくお断りいたします。

演奏会アンケートは
こちらから
<https://www.njp.or.jp/qs>



オリックス

公益財団法人 オリックス宮内財団



オーストリア文化フォーラム

austrian cultural forum



©Ben Ealovega

アルマ・ドイチャー [指揮] Alma Deutscher, Conductor

アルマ・ドイチャー（2005年生まれ）は作曲家・ヴァイオリニスト・ピアニスト・指揮者。2歳でピアノ、3歳でヴァイオリンを始め、6歳でピアノ・ソナタ、9歳でヴァイオリン協奏曲を作曲した。ズービン・メータは「最も偉大な才能の一人」と称賛し、サー・サイモン・ラトルも「この年齢でこれほど多才な人物を知らない」と語っている。19年にヨーロッパ文化賞を受賞し、独誌『シュテルン』の「明日の英雄」に選出。同年カーネギーホールでのデビュー公演は完売し、長いスタンディングオベーションを受けた。自作オペラ『シンデレラ』は3大陸で上演され完売。初のピアノ・ソロ・アルバム『From My Book of Melodies』はソニー・クラシカルから、楽譜はG.シャーマーから出版された。自作曲のソリストとして主要音楽祭に出演し、イスラエル・フィルやロイヤル・フィルなどと共演。世界の主要紙やテレビでも広く取り上げられ、17年にはBBCとCBSの1時間番組の特集対象となった。



©Ayako Yamamoto

中原梨衣紗 [ヴァイオリン] Riisa Nakahara, Violin

愛知県岡崎市出身。第93回日本音楽コンクール第2位および黒柳賞受賞。第19回ベートーヴェン国際ヴァイオリンコンクール第1位、第18回クロスターシェーンタール国際ヴァイオリンコンクール第1位およびヴィルトゥオーゾ賞受賞。全日本学生音楽コンクール小学校の部・中学校の部共に全国大会第1位および横浜市民賞（聴衆賞）受賞など国内外のコンクールにおいて多数入賞。2020年シュロモ・ミンツ氏主催、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）難民支援のためのチャリティーコンサート「United in Music」に世界30か国の演奏家チームの一員として参加。これまでにソリストとして、都響、新日本フィル、東京フィル、名古屋フィル、セントラル愛知響、東京シティ・フィルなどと共演。指揮者では大植英次、下野竜也、藤岡幸夫、松尾葉子、園田隆一郎、角田鋼亮、和田一樹、水戸博之、阿部未来、田尻真高の各氏と共演。これまでに市川絵理子、平田文、清水高師の各氏に、現在、豊田弓乃氏に師事。桐朋女子高等学校音楽科3年に特待生として在学中。使用楽器は（株）日本ヴァイオリンより特別貸与されている1761年製 Nicolo Gagliano。

ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト（1756~91）を筆頭に、音楽の歴史には「神童（ドイツ語でWunderkind ヴンダーキント）」と呼ばれたミュージシャンが何人も現れてきた。ただし「十で神童、十五で才子、二十過ぎれば只の人」（あるいは、簡略化された「神童も二十歳過ぎれば只の人）」という文句があるように、天賦の才能は必ずしも大成を約束されていない。おそらく最も多いのは、子どもらしからぬ成熟した演奏を聴かせた少年少女が、大人になってから自らの個性を確立できないケースではないだろうか。

作曲における神童も、幼い頃に作曲しただけでは真の意味で凄いとはいえない。最古の作品が5歳頃だったモーツァルトでいえば、父レオポルドのように熱心な指導者のサポートがあつてこそ、実のところ実現可能だからだ（指導という名の修正が加えられた上で、少年モーツァルトの自筆譜が書かれた可能性が非常に高いのである）。しかし今日でも日常的に演奏されている交響曲第25番ト短調を、17歳の頃に生み出したという事実は神童と呼ぶ他ない。同様に17歳のシューベルトによる歌曲「糸を紡ぐグレートヒェン」、16歳のメンデルスゾーンによる弦楽八重奏曲変ホ長調、18歳のR. シュトラウスによるホルン協奏曲第1番 変ホ長調、19歳のショスタコーヴィチによる交響曲第1番ヘ短調あたりは年不相応な傑作であり、彼らこそが成熟にも成功した神童だったのであろう。

■ モーツァルト：歌劇「フィガロの結婚」K. 492 序曲

モーツァルト ▶ オペラの物語

19歳になる直前のモーツァルトが完成させた歌劇「偽りの女庭師」（1774~75）は、11年後に誕生する「フィガロの結婚」（1785~86）や「ドン・ジョヴァンニ」（1787）の先駆となったとされる。物語の根幹をなす、複数のカップルによる恋愛関係が揺さぶられたり、女性の尊厳が傷つけられたりといったテーマに、モーツァルトが初めて向き合ったのが「偽りの女庭師」だったと言われてきたのだ。

作品の特徴 ▶

フランスの劇作家ポーマルシェ（1732~99）の原作に基づく「フィガロの結婚」は、貴族が召使いの新妻と先に一夜をともにする「初夜権」をめぐるドタバタ劇。つまりフィガロは婚約者スザンナを、雇い主である狡猾な伯爵から守ろうと、夫に裏切られた伯爵夫人の協力を得ながら計略を巡らすのである。機知に富んだフィガロたちの姿を想起させるのが、幕が上がる前に演奏される序曲だ。ソナタ形式（提示部－展開部－再

現部（コーダ）だが、展開部は経過部のような役割しかなく、コーダで展開部の代わりとなる盛り上がりが生み出されて、これからはじまる物語への期待が高められる。

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。

■ モーツァルト：ヴァイオリン協奏曲第5番 イ長調 K. 219「トルコ風」

▶ モーツァルトのヴァイオリン協奏曲

偽作を除くと、モーツァルトは生涯に5つのヴァイオリン協奏曲を残している。第1番だけ17歳で、第2～5番は19歳の頃に書かれた。前述した「偽りの女庭師」はドイツ南部のミュンヘンを拠点とするバイエルン選帝侯からの依頼で生まれ、1775年1月に初演されたのだが、当時のバイエルン宮廷はフランス文化を積極的に取り入れていたため、モーツァルトは当地でフランス趣味の音楽に出会う（実際にパリを訪れるのは数年後のことだ）。流麗な装飾を伴う軽い旋律が上品な会話をかわしていくフランス風のギャラント様式を取り入れたのがヴァイオリン協奏曲第2番であった。

▶ 10代最後の年に完成した傑作

一方、6ヶ月後に完成したこの第5番ではフランス風の流れるような麗しさはそのままに、息の長いフレーズが増えたり、管弦楽と独奏ヴァイオリンの会話が深められたりと、独逸音楽の要素も巧みに織り込まれた作品に仕上げられた。10代のモーツァルトが手掛けた作品のなかで、最高傑作と評されることもあるほどだ。なお「トルコ風」という愛称は、後述するように終楽章に由来する。

▶ 曲の構成と音楽の特徴

第1楽章 ソナタ形式。管弦楽だけの提示部のあと、独奏ヴァイオリンがゆったりとした導入部を伴って登場。要素を加えながら、提示部を繰り返していく。短めの展開部では短調になって緊張感を増していくが、再現部の直前で明るさを取り戻す。通例通り、終盤には独奏ヴァイオリンだけで奏されるカデンツァが置かれている。

第2楽章 ソナタ形式。本作における白眉に位置付けるべき、落ち着いたテンポによる緩徐楽章。穏やかなだけでなく、時おり短調に足を踏み入れていくと、孤独の深淵を覗き込むかのような、まさに年不相応な音楽へと変貌する。

第3楽章 ロンド風の形式。主題となる3拍子の優雅なメヌエットが何度もあらわれる間に、異なる性格の音楽が挟み込まれていく。特に印象的なのが中盤に挟み込まれる短調の速い2拍子で、全員で激しく「トルコ行進曲」風のリズムを刻む。低弦には当時としては珍しく、弓の木の部

分で叩くように演奏するコル・レーニョ奏法まで使われている。

【楽器編成】ヴァイオリン独奏、オーボエ2、ホルン2、弦楽5部。

■ ベートーヴェン：交響曲第7番 イ長調 op. 92

現在でも演奏頻度の高いベートーヴェン作品のなかで、最も若い頃に書かれたのは22歳頃のピアノ・ソナタ第1番（1793～94）であろう。実はその第2楽章は、14歳で作曲されたピアノ四重奏曲の旋律がもとになっている。また有名なピアノ・ソナタ第8番「悲愴」（1797～99）も、12歳頃に書かれた「選帝侯ソナタ」第2番が下敷きになっていたりと、神童時代の作品は、後の創作にも活かされているのだ。

▶ 40代初めに作曲された人気作

交響曲第5～6番から3年ぶり、41歳頃に書かれた交響曲第7番（1811～12/13）は楽章ごとに舞曲由来のリズムを執拗に反復するのが最大の特徴だ。本来は身体性を伴う舞曲のリズムを精神性の高い音楽へと昇華させたため、ワーグナーは1849年の論文で「舞踏の神格化 Apotheose des Tanzes」と評している。

▶ 曲の構成と音楽の特徴

第1楽章 ソナタ形式。緩やかな序奏が静まると、フルートが特徴的なリズムを刻みだすところから主部へと突入。英国の舞曲ジグに由来する、反復される3音のリズム（ターン | タ | タッ）は第1楽章のあいだ、オーケストラの至るところに登場。展開部などでは2音目から始まるリズム（タ | タッ | ターン）に読み替えられるので単調にならない。

第2楽章 三部形式。行進曲風のリズム（ターンタタ | ターンターン）を2小節周期で繰り返しながら、徐々に盛り上がっていく。中間部ではリズムの前半（ターンタタ）だけが反復される。

第3楽章 五部形式。速いスケルツォでは跳ねるようなリズム（タン | タラン | タ）、少シテンポが落ちてくトリオ風の挿入部では谷型の刺繍音（レ・#ド・レ）が執拗に繰り返される。

第4楽章 ソナタ形式。冒頭に2回繰り返されるリズム（タン | タタ | タン）はフランス発のコントルダンスを思わせる。だが続いて登場する第1主題はベートーヴェンが編曲した「アイルランド民謡集」WoO 154（1812～13）の第8曲「まじめで分別くさいのはごめん」に登場する旋律が下敷きになっている可能性が高く、そう考えるとコントルダンスというよりもスコットランドの舞曲リールのリズムと捉えるべきかもしれない。

【楽器編成】フルート2、オーボエ2、クラリネット2、ファゴット2、ホルン2、トランペット2、ティンパニ、弦楽5部。